

~~JAP4110 Classical Japanese, Autumn semester, 2011~~

Wednesday 26 October 2011, four (4) hours

Dictionaries or other reference books may **NOT** be used.

1. Translate the passages from the following texts.

Tekst A: Taketori Monogatari

Tekst B: Ise Monogatari

Tekst C: Hôjôki

2. Analyze grammatically the passages in the texts marked by lines.

TEXT A

竹取の翁、竹を取るに、この子を見つけて後に竹取るに、筋をへだててよごとに、黄金ある竹を見つける事かさなりぬ。かくて翁やうくゆたかになり行。

この児、やしなふ程に、すくくと大きになります。三月ばかりになるほどに、よき程なる人に成ぬれば、髪上げなど左右して、髪上げさせ、裳着す。帳のうちよりもいささず、いつきやしなふ。この児のかたち、けうらなる事、世になく、屋のうちは、くらき所なく、光みちたり。翁、心地あしく苦しき時も、この子を見れば、苦しき事もやみぬ。腹立たしきこともなくさみけり。

翁、竹を取る事久しくなりぬ。いきおひ猛の者に成にけり。この子、いと大きに成ぬれば、名を、御室戸齋部の秋田をよびて、つけさす。秋田、なよ竹のかぐや姫とつけつ。この程三日、うちあげ遊

ぶ。よろづの遊びをぞしける。おとこはうけきはす呼びつどへて、いとかしく遊ぶ。

世界のおのこ、賢なるもいやしきも、いかでこのかぐや姫を、得てしかな、見てしかなと、をとに聞きめでまどふ。そのあたりの垣にも、家の門にも、をる人だにたはやすく見るまじき物を、夜はやすき寝も寝ず、闇の夜に出て、穴をくじり、かひ間見、まどひあへり。さる時よりなむ、「よばひ」とは言ひける。

人の物ともせぬ所にまどひありけども、なにの験あるべくも見えず。家の人どもに物をだに言はんとて、言ひかゝれども、ことどもせず。あたりをはなれぬ君達、夜をあかし、日をくらす、多かり。

TEXT B, 1

(五 段)

むかし、おとこ有けり。東の五条わたりにいと恐びていきけり。
みそかなる所なれば、門よりもえ入らで、童への踏みあけたる樂地の
のくづれより通ひけり。人しげくもあらねど、たびかさなりければ、
あるじ聞きつけて、その通ひ路に、夜ごとに人をすへてまもらせけ
れば、いけどもえ逢はで帰りけり。さてよめる。
。人知れぬわが通ひ路の関守はよひくごとにうちも寝ななん
とよめりければ、いといたう心やみけり。あるじゆるしてけり。
一条の戸に恐びてまいりけるを、世の聞えありければ、兄人たちの
まもらせたまひけるとぞ。

TEXT B, 2

(六 段)

むかし、おとこありけり。女のえ得まじかりけるを、年を経てよ
ばひわたりけるを、かららして盗み出でて、いと暗きに來けり。芥
川といふ河を牽ていきければ、草の上にをきたりける露を、「かれ
は何ぞ」となんおとこに問ひける。ゆくさき多く夜もふけにければ、
鬼ある所とも知らで、神さへいとみじう鳴り、雨もいたう降りけ
れば、あばらなる蔵に、女をば奥にをし入れて、おとこ、弓胡籙を
負ひて戸口に居り、はや夜も明けななんと思つゝゐたりけるに、鬼は
や一口に食ひてけり。「あなや」といひけれど、神鳴るさばぎにえ

聞かざりけり。やうく夜も明けゆくに、見れば、牽て來し女もな
し。足をりをして泣けどもかひなし。

白玉かなにぞと人の問ひし時露とこたへて消えなましものを
これは、二条の后のいとこの女御の御もとに、仕うまつるやうに
てあたまへりけるを、かたちのいとめでたくおはしければ、盗みて
負ひて出でたりけるを、御兄人堀河の大臣、太郎國經の大納言、ま
だ下らうにて内へまゐりたまふに、いみじう泣く人あるを聞きつけ
て、「とどめてとりかへしまうてけり。」それを、かく鬼とはいふな
りけり。まだいと若うて、后のならにおはしける時とや。

三四町を吹きまくる間に、こもれる家ども、大きなも小さきも、

一つとして破れざるはなし。きながら本に倒れたるもあり、桁柱

ばかり残れるもあり。門を吹きはなちて四五町がほかに置き、また、

垣を吹きはらひて隣と一つになせり。いはむや、家のうちの資財、

数を盡して空にあり、檜皮・葺板のたぐひ、冬の木の葉の風に乱

(る)るが如し。塵を煙の如く吹(き)立てたれば、すべて目も見えず、

おびたくしく鳴りどよむほどに、もの言ふ聲も聞えず。かの地獄の

業の風なりとも、かばかりにこそはとぞおぼゆる。家の損亡せるの

みにあらず、これを取り纏ふ間に、身を損ひ、かたはづける人、数

も知らず。この風、末の方に移りゆきて、多くの人の歎きなせり。

辻風は常に吹くものなれど、かゝる事やある、たゞ事にあらず、

さるべきものさとしか、などぞ疑ひ侍りし。

また、治承四年水無月の比、にはかに都遷り侍(り)き。いと思ひ

の外なりし事なり。おほかた、この京のはじめを開ける事は、嗟哉

の天皇の御時、都と定まりにけるより後、すでに四百余歳を經たり。

ことなるゆゑなく、たやすく改まるべくもあらねば、これを世の

人安からず憂へあへる、實にことわりにも過ぎたり。

されど、とかくいふかひなく、帝より始め奉りて、大臣・公卿

みな悉く移ろひ給ひぬ。世に任ふるほどの人、たれか一人ふらさと

に残りをらむ。官・位に思(ひ)をかけ、主君のかけを頼むほどの人

は、一日なりとも疾く移ろはむとはげみ、時を失ひ世に余されて期

する所なきものは、愁へながら止まり居り。軒を争ひし人のすまひ、

日を経つゝ荒れゆく。家はとぼたれ下淀河に淨水、地は自のまへは

島となる。人の心みな改まりて、たゞ馬・鞍をのみ重くす。牛・車

を用する人なし。西南海の領所を願ひて、東北の庄園を好まず。

TEXT